

多読授業に向けての基礎的研究(2)

林 剛司*

An Introductory Study on Extensive Reading Class (2)

Takeshi HAYASHI*

キーワード: 多読、文法訳読、単語学習、多読用図書、GR

9. 文法訳読方式 (Grammar-Translation Method)

伝統的な日本の英語教授法として、文法訳読方式を思い浮かべる人は多いだろう。私自身、中学生、高校生の頃に受けた英語の授業のほとんどは、文法訳読を中心に展開された。教科書の新しいレッスンに入る際には、予習をしてから授業に臨むよう、教師から指示された。新出単語の意味を辞書で調べ、ノートに書き出し、場合によっては教科書の本文をすべてノートに書き出し、その英文の下に自分で日本語訳を書いて、そのノートを授業の際に持参した。授業では、生徒が次々に指名され、自分が書いてきた日本語訳を発表していく。その日本語訳の間違えている箇所を教師が直す。生徒たちは自分のノートに書いてきた日本語訳と教師が言う日本語訳を比べて、教師の日本語訳を「正解」とし、自分の日本語訳を訂正していく…

私が中学校、高校の教員になってからも、しばらくはこのような授業方式をとっていた。

定期試験直前に生徒たちの勉強方法を観察してみるとわかったのは、英語があまり得意ではない生徒たちは、(英語を英語で理解する、ということ諦めてしまったのか)日本語訳を覚え、その次には新出単語を(発音や使い方には全く着目せずに)「一単語一和訳」方式で丸暗記しようとしていたことである。

私はこの様子を見て、ただちに授業のスタイルを変えなければならないと思った。文法訳読方式で授業を行なっている限り、読んで取り込む(input, intake)英語の量はきわめて少ないことは、「多読授業に向けての基礎的研究(1)」¹⁾においてすでに述べた。また、訳読のみを行い、授業を終了した場合、生徒たちの頭の中には、日本語が蠢いてはいようが、肝心の英語がま

ったく取り入れられていない、ということもすでに述べた。

試験で良い点数を取ることによって高く評価されるわけであるから、そのために授業を真剣に受ける。授業が文法訳読方式であるなら、当然試験にも和訳問題を出題し、生徒たちが英文を正しく日本語に訳せるかどうかを評価してやらなければならない。生徒たちは、和訳問題で良い点数を得るために、下手な和訳をしてはいけないと思い、授業で先生が言った「模範的な」和訳を丸暗記し、そのまま解答用紙に書こうとする。そのため、生徒たちは、授業中は先生の言う和訳を一字一句正確に書き取ろうとする。これは英語の授業というよりも、日本語の書き取り練習のようであり、英語の授業とはいえないのではないだろうか。

そこで、私はこの頃から現在に至るまで、試験において「和訳問題」は一切出題しないことにしている。英文を訳そうとして、最適な日本語が書けるまであれやこれやと「日本語を」頭の中で考え悩んでいる(?)時間は非常に勿体ないこと、あまり意味のないことのように思えてならないからだ。

英語の試験では、学習者がどのくらい「英語」をたくさん、正確に知っているか、「英語」をどのくらい上手に表現できるか、また、読めるか、ということを試したいものである。私は「和訳問題」を出題しない代わりに、英語を別の英語に置き換える問題(rewording/paraphrasing)や、「和文英訳」「英作文」などを中心に出題している。

私は、英語の授業(や学習)から日本語を完全に排除しよう、という考え方の持ち主ではない。日本語が母語である以上、英語で読書をしたり、会話をしたりする際に、日本語を完全に介さないで意味処理することはないであろう。頭の中にある日本語を排除することは不可能である。

しかし、いちいち日本語に一字一句訳さないと気がすまない、そうしないと英語が読めない、聞けない、ということだと、一向に英語力は向上しないであろう。英語を使って仕事、研究を行なう際にも、効率よく情報処理を行ないたいと思えば「直読直解」「直聴直解」

* 教養科, Division of Liberal Arts

¹⁾ 林 剛司「多読授業に向けての基礎的研究(1)」『沼津工業高等専門学校研究報告 第42号』沼津工業高等専門学校, 2008年)。以下「基礎的研究(1)」と表記する。

を目指したい。

難しい英文で書かれている検定教科書を使う際に、文法訳読で教科書を「解説」していくと、和訳に時間がとられ、英語そのものを「練習」する時間がなくなる。そこで、「基礎的研究(1)」でも述べたが、私は「和訳先渡し授業」を行うことにより、日本語・英語の照らし合わせは終えたという前提で、教科書の英語表現を使って rewording や paraphrasing させたり、音読練習、内容に関する質問に英語で答えさせたり、ペアワークをさせたり、本文の内容を要約させたり等、授業時間のほとんどを「練習」に充てることができた。

文法訳読方式で授業を行なっている先生方で、この方式が学習者の英語力向上に寄与するという自信、および論理的根拠を持っている人はどれくらいいるのだろうか。自分が学生時代に受けた授業が文法訳読中心だったから、とか、それ以外の教授法を知らない、という理由だけで同方式に固執しているのではないだろうか。

そもそも、同方式を正当化する研究文献はほとんどないし、言語学、心理学、教育理論と結びつける研究もほとんどされていない。²

W.M. リヴァースは、文法訳読方式を批判し、「正確な発音やイントネーションには力点をおかない。伝達技能は無視する。規則と例外を覚えることに多大の重点をおくが、自分の考えをそのことばを積極的に使ったり書いたりして表現するといった訓練はほとんど与えられない」ことが同方式の欠点であり、「平均的な生徒たちは、骨の折れる、しかも単調な学習だと感じている作業——単語を覚えること、訳すこと、際限のない練習問題をすること——に精を出さねばならないが、たいしてその言語が上達したとは感じられないし、その言語を使って自分の考えを表現する機会などはほとんどない」と述べている。³

外山滋比古は、英語を読むことについて、次のように述べている。

読むことは、もともと、解釈とは違う。ましてや翻訳とはまったく別の作業である。それなのに、英語を読みながら、原文の語順を入れ替えたりし

て、日本文としてもある程度、ととのった訳文を作る翻訳を同時に行なうのは、いわば余計な負担を買って出ているようなものである。読むときには、読むことだけに専念して、ほかのことには心をわずらわされないことである。⁴

訳読をせずにリーディングの授業を行なう教師は増えてきているし、実際に訳読せずに英文を読むことは可能である。⁵

単語学習や語彙指導についても私はここで述べてきたことと同様の考え方を持つ。多読を成功に導くために、誤った単語学習や語彙指導は「百害あって一利なし」である。

次に、単語学習と語彙指導について述べてい

10. 単語学習と語彙指導

そもそも私は「単語学習」という表現(があるのかすら知らないが)自体があまり好きではない。市販の大学受験用単語帳などで単語を丸暗記することなど、私自身がやったことがないし、文章やストーリーから単語だけを取り出して、単独で覚えることにあまり意味があるとは思えない。ましてやこれを学生たちに強いることはしたくないのだが、本校では「制度」として単語テストを行なうことになっているので、大変苦痛である。そのような私の辛い胸中を打ち明けることが本稿の目的ではないので、とりあえずは私が考える「好ましくない」単語学習、語彙指導法とその改善策を述べたい。

はじめに誤解なきよう注釈をつけさせていただけるなら、私は単語を知らなくてもいいとか、覚えなくてもいい、と学生たちに言ったことは一度もない。単語を知らなくていいはずがない。

しかし、問題はその習得法である。

まず、市販の単語帳で単語を覚えさせるという方法に私は賛同しかねるのだが(その理由は後述する)、どうしても単語帳を使え、と強制されるならば、学生が飽きないで単語学習を継続でき、覚えやすい編集がなされている単語帳を選ぶことから始めるだろう。

岡田順子は、最新の話彙習得理論に基づいて、理想

² Jack C. Richards, Theodore S. Rodgers(2001). *Approaches and Methods in Language Teaching: A Description and Analysis*, Cambridge University Press を参照。

³ W.M. リヴァース(天満美智子・訳)『外国語習得のスキル—その教え方』(研究社、1972年)、p.17。

⁴ 外山滋比古『外国語を考える』(ELEC出版部、1972年) p.125。

⁵ 樋口忠彦、緑川日出子、高橋一幸(編)『すぐれた英語授業実践』(大修館書店、2007年)、第5章を参照。

的な市販の単語集(受験用)の基準を次のように述べている。

- (1) アルファベット順でないもの
- (2) カテゴリー分けしていないもの
- (3) 両方とも新出語である、同意語、反意語などを提示していないもの
- (4) 例文が示されており、その例文はできるだけ簡潔で、平易でインパクトのある文であること
- (5) 音声がついているもの
- (6) 生徒のレベルに合ったもの⁶

岡田は上記の(1)について、「つづりが似た単語が並んでいると、生徒は混乱する」と述べており、(2)については「(1)と同様に、あるカテゴリー(動物なら動物)の単語ばかり並んでいると、やはり混乱のもとである」と指摘している。(3)については「subject を知らない生徒に、同じく知らない反意語 object を示すのは逆効果」と述べている。これらはいずれも正鵠を射た指摘である。

(2)について考えるために、手元にある某単語帳を開いてみた。ある頁を開くと、annoy, annoying, annoyed が並べられている。

また、別の頁には「…するとすぐに」の表現が5つ並べられている。as soon as…「…するとすぐに」、the moment…「…するとすぐに」、no sooner … than ~「…すると同時に～、…するとすぐに～」、hardly… when (before) ~「…すると同時に～、…するとすぐに～」…というふうに記述がなされているが、これを暗記することに意味があるのだろうか(というより、暗記できるだろうか)。

さらに別の頁には、get を使った熟語が並べられている。これなども先述の岡田の理想からは完全に離れている。get to do「～するようになる」、get … to do「…に～させる」、get down to…「…に(真剣に)取りかかる」、get through「…を終える」、get at…「…を言おうとする」…などというリストを覚えなければならぬとすると、かなり苦痛なのではないだろうか。それらの熟語を紹介し、例文も提示してはあがるが、それらの例文も、前後に何か文があったり、ストーリー性を持つものではなく、それぞれが「その熟

語を覚えさせるためだけに作られた文」である。その文を眺めていても(少なくとも私には)その熟語をどうやって使えばよいかが見えてこない。その熟語を使えるようになりたいと思えば思うほど、他にも用例を見たり聞いたりしてみたいと私なら思う。

佐伯智義は単語学習について、次のように述べている。

自分が作った単語帳であれ、市販されているそれであれ、単語帳で単語を覚えようとするのは、効率が悪く、苦痛に満ちたやり方だ。言葉の一つ一つは、文の中で他の単語と関係しあって意味を持つものだから、文章から単語を切り離して、日本語の意味で覚えても、会話や作文で、その言葉の意味を取り違えて、使ってしまう恐れがある。

(中略)

文章と共に単語を覚えるのは、文章から切り離して、単語だけ覚えるのよりやさしい。なぜなら、その単語の意味は、文章全体の意味から、推測できるからだ。⁷

現在、本校では1, 2年生に対して単語テストを行なっている。週に1~2回しか授業がないのだが、少なくとも(単語帳を2年間でとりあえず「終える」ことを目指すのなら)週に1回は単語テストを授業中に行なわなければならないので、ほぼ毎授業時の最初の10分(採点も含む)をテストに充てる。さらに、次のテスト範囲を伝え、その部分を覚えてくるように指示するのだが、発音も使い方もわからない単語を丸暗記してくるのは意味がないことだというのは明白なことなので、次回までに覚えてくる単語を発音練習し、場合によっては説明を簡単に付け加える。これに10分ほどかかるので、単語テスト絡みで20分ほどの時間を費やす。

私は20分もあれば、質・量ともにベストだと思える多読指導ができる自信があるが、本校の「制度」上、やむをえず単語テストを優先させる。

単語テストを印刷し、それを持って教室に行く。学生たちは単語帳を見ながらブツブツ唱えている。debt を「デプト」、aware を「アワレ」と発音しながら…そんな彼らを「憐れ」に思いながらも、制度として課されている単語テストを実施する…

⁶ 岡田順子『語彙の定着をさらに促進する単語テスト集』(アルク、2007年)、p.22。

⁷ 佐伯智義『科学的な外国語学習法』(講談社、1992年)、pp.207-208。

学生たちは、家庭学習で単語帳を眺め、(語法を知らないまま、間違った発音とともに)覚えてくる。私は「基礎的研究(1)」において述べたように、家庭学習としては、教科書の本文を音読、筆写することを、そして、多読を実践することを提唱したいのだが(そのほうが効果があると思えるため)、それらに費やす時間は学生たちにはないようである。

繰り返すが、私は単語を知らなくてもいい、単語は覚えなくてもいい、とは一言も言っていない。しかし、肝心の教科書の単語はいつ覚えるのか。教科書に出てくる単語は、きちんと文章の中に出てくるので、文章ごと(暗記するほどまでに)音読すれば、単語も文法も両方学べ、なおかつ論理的な、中身のある英語の文章をまとめて頭にinputできる。

単語を、「一英語、一和訳」のように覚えることはまったく意味がない、というのは、多くの言語学者、言語教育者の同意を容易に得られることだろう。しかし、本校の学生の勉強法を見ていると——これは彼ら自身が編み出した方法なのか、教師に言われてやっていることなのか——1つの英単語に1つ(ないし2つ)の和訳をつけて、それを紙に4回くらい書いて「勉強した」気になっているのである。「*overlook*、見落とす、*overlook*、見落とす、*overlook*、見落とす、*overlook*、見落とす」というふうに紙に書いている。*overlook*は、実際に最近の単語テストで出題した単語であるが、例文ごと書き写すのならまだしも、単語を1語取り上げて、丁寧にその訳語(の一部の一部)まで書いている。これはいったいどのような教育的、学術的、言語的観点から編み出されたメソッドなのだろうか。このようなことをして、その学生の英語力にどれほどの変化が起きるのであるか。「見落とす」という日本語を繰り返し書く意味もわからない。

例文といっても、このメソッド(?)を実践している学生が使っている単語帳には、“I'll overlook your behavior this time.”(今回は君の行動を大目にみてあげる)という文が載っているだけである。

この単語帳には、訳語として、「①～を見落とす;～を大目に見る ②～を見おろす」と書いてある。①の「～を見落とす」の部分だけ赤字になっており、これは、赤透明のシートをこの部分に被せればその訳語が消えるので、*overlook*を見たときに、咄嗟に「～を見落とす」と機械的に言えるようになってほしい、という著者の心遣いなのかもしれない。

しかし、例文の中の *overlook* は「～を大目に見る」という意味である。私はこの時点で混乱するし、この

試練を乗り越えなければ英語を習得することができないのだとしたら、私ならこれ以上英語に関わることはやめ、別のことにエネルギーを注ぐことにするだろう。

暗記しようと必死になってテスト前に覚えたことや、大急ぎで何かを考えた場合、その情報は長期記憶ではなく短期記憶にしか入らず、わずか数秒でまた出ていってしまう。これは科学的に証明されていることである。

そもそも、私は英語が「暗記科目」だとは思っていない。私は中学生のころから現在に至るまで、かなりまとまった量の英文を「音読」しているが、その際に「暗記しよう」と意気込んで音読することはない。暗記は、音読を繰り返した「結果」であって、「目的」ではない。⁸ 英語のスピーチコンテストに出場する学生たちにいつも言うことだが、5分間のスピーチ原稿をすべて暗記するのは気が遠くなるような、辛い作業である。しかし、それは「暗記しなければ」と意気込むから気が重いのであって、何十回、何百回と音読すれば普通は覚えられるものである。平たく言えば「繰り返し」が大切だということである。繰り返さないかぎり、情報は短期記憶で止まってしまい、長期記憶に入らないのである。

言語政策、英語教育学の専門家である山田雄一郎は「英語学習に暗記は要らない」という持論を、次のように述べている。

英語(外国語)学習に暗記は禁物である。暗記は、近道のように見えてそうではない。一夜漬け型、単語帳型、文法公式型、会話例文型など、暗記の対象となりやすいものは英語学習の中にたくさんある。英語は暗記科目などという教師もいるくらいだから、とにかく暗記しなくては話にならないと思いこんでいる人も多だろう。しかし、私の学習法では、暗記は禁物である。理由は、簡単である。覚えたものは、思い出さない限り使えない。滅多にない英語使用の場面で、昔覚えたものをとっさに思い出すことなど、誰にとっても簡単ではない。特に、A=B式の短絡的な暗記の場合、長期記憶にはまったく向かない。その努力のむなしさは、一夜漬けの勉強で経験した人も多はずである。⁹

⁸ このことは、林 剛司『英語は「多読」中心でうまくいく!』(ごま書房、2006年)において詳述した。

⁹ 山田雄一郎『英語教育はなぜ間違っているのか』(ちくま新書、2005年) p.221-222。

英語学習では「繰り返し」が大切であり、繰り返さないかぎり、情報は短期記憶で止まってしまい、長期記憶に入らない、と先に述べた。

これを字句どおり受け止めると、単語帳を使って単語を暗記していくやり方であっても、その単語帳を繰り返し覚える——つまり、単語帳を使って一通りテストするくらいでは長期記憶に入らないので、最後のページまでいったら、もう一度最初に戻って「繰り返し」テストをする——ということで語彙力が身につく、という発想を持つ人もいるかもしれない。

百歩譲ってこの説を支持するとしよう。1冊の単語帳を繰り返したいのならば、進度を速め、とりあえず早く1回終えなければならぬので、1回のテスト範囲を広くするか、毎日（英語の授業がないときでも、たとえば朝の10分間を使うなどして）単語テストの実施回数を増やすしかない。前者の策をとるならば、一度に覚えなければならぬ単語数はぐんと増える。後者をとるならば、ほぼ毎日単語テストの勉強に明け暮れることになり、それ以外の英語学習（音読、筆写、文法の練習問題を解く、など）を行なう余裕はほとんど残らないのではないだろうか。

学生たちは英語の勉強ばかりをやっているわけではなく、他の教科からも宿題、レポート等が多く出ているうえ、部活動もあり、寮での仕事もあるかもしれない。学生たちの負担が大きくなるだけで、「骨折り損の草臥れ儲け」である。ますます「英語嫌い」を量産するだけだと断言できる。

リーディングをやりながら、読んでいるテキストの中に出てくる単語をその都度覚えていけばいいのではないだろうか。わざわざ単語帳を使う必要もないと思うが、単語帳をどうしても使いたいならば、とにかく多読であれ精読であれ、それなりの量の英文を読ませ、その後に「確認」作業の一貫として単語帳で「だめ押し」する、という形のほうがまだ良いのではないだろうか。

馬本勉は、「自分の必要とする語を学びやすく配列した単語集を選び、片端から覚えたいものですが、『教科書だけでも大変なのに』という声が聞こえてきます。そもそも語源や語のネットワークを頼りに学ぶ方法は、知っている語を整理するときこそ役立つ、という一面を持ちます。語源式にせよ連想式にせよ、単語集はある程度学習が進んだ後のチェックリストとして使う

とよいかもしれません」¹⁰と述べている。単語集を「ある程度学習が進んだ後のチェックリストとして使う」という点に賛同できる。

日本多読学会を通じて親しくお付き合いさせていただいている志学塾¹¹では、単語学習は、多読の読書語数が100万語を越え、かつ単語学習を希望する生徒のみが、『速読英単語』（Z会出版）を使っている。利用方法は、読み流すだけで、意味がつかめない場合は、日本語部分を読んでから英文に移るということを繰り返す。同塾でも英単語を日本語と1対1で覚えるということとは推奨していない（というよりも否定している）、と同塾の鈴木貴志は言う。

単語帳による単語学習に何らかの意味を見出したいがために、単語帳学習を支持・推進したいと考える教師は、例えばこのような課題を学生に課す：「（これまでの単語テスト範囲である）単語帳〇ページから△ページまでの単語を使って、何でも良いから英文を5つ書いてきなさい」

このような課題は、そもそも面白くないし、どのような意図、目的、効果があるのか、全く理解できない。

英語を書くことにより語彙力を強化したいのならば、学習者は自分が普段考えていること、自分の研究や仕事、生活に密着した事象、どうしても英語で表現しなければならない「必要性」があることなどについて英語で書こうとするときに、はじめて単語や表現を本当に覚えることができる。私は専攻科の「英作文」の授業を担当しているが、受講生たちに毎日英語で日記（journal）を書かせている。彼らは学校生活、家庭、趣味、研究、友人などのことについて、あるいは読んだ本、観た映画やドラマ、訪れた国や町などについて、英語で書いてくる。「自分に関係のある」ことについて表現しなければならない「必要性」に迫られ、必要な単語や表現が思い浮かばないときは、必死になって辞書を引く。受講生たちの声を聞くと、この作業で本当によく単語や表現を覚えた、といっている。

必要性があり、尚且つ内容が自分に関係のあることを英語で作文するとき、自発的に単語を調べ、積極的

¹⁰ 馬本勉「語彙指導はこうしよう」『英語教育』（2006年6月号、大修館書店）p.11。

¹¹ 大学進学のための学習塾だが、英語多読授業を行っている。多読と速読、ディクテーション、英作文、シャドウイングを組み合わせたユニークな授業を行なっている。連絡先：沖縄県那覇市首里儀保町2-44、電話098-885-1588。http://www.shigaku-juku.co.jp/

にその単語を吸収していくのである。

単語帳の特定範囲の中に出てくる単語を使って何でもよいから英文を書いてくるように、などという課題を学生たちに課す教師に出会うたびに、「私は動物園で猫を見ました」「私は八百屋で消しゴムを買いました」などという英文を学生たちが書いてこないこと私は切に祈る。

「高専らしい英語教育」を考えるにあたって、他高専の英語教育実践から学ぶところも多々ある。

東京高専では英単語コンテスト(テスト)なるものを実施していた。年に一回1年生～3年生までを対象として、年度当初に全員に購入させた英単語集から範囲を決めて出題する、というものであった。学年を超えて学級活動の時間を利用し、一斉に30分程度の試験を実施していた。結果は公表され、成績上位者が表彰されるという、本校と似た仕組みである。

このやり方で10年ほど実施したが、次第に明らかになった問題点は、1年生が一番成績が良く、2年、3年になるに従って成績が下がってしまう、ということであった。

英語は本来積み重ね(繰り返し)で力が付いてゆくという考えからすれば、高専における英語教育の効果に対して疑問符の付く結果になった。学生も自らの英語について「高専に入学してからだんだん英語力が落ちた」と発言することがしばしば見受けられることから、このまま今ある英単語コンテストの形式を続けるのは得策ではない、と英語科で判断し廃止に至った、と東京高専の竹田恒美から説明を受けたことがある。

しかし、当然、一斉の英単語コンテストの形式は効果がないために廃止したからと言って、東京高専の英語科が語彙指導の必要性を否定しているわけではない。「基礎的研究(1)」において述べたように、東京高専では、多読の結果、TOEICの得点が300点から900点まで伸びた学生もいる。

竹田の観察によると、1年生は英語に限らず、学業に対しては真面目によく頑張るので、中だるみの時期の2,3年生よりはよく取り組む結果が英単語コンテストの結果に表れているに過ぎないと考えられている。

11. GR、および英米の絵本の魅力

多読授業で使用する図書を紹介したい。まずは、GR(Graded Readers)と呼ばれるものがある。これは、語彙をレベルごとに制限して書かれた学習者向けの英語小説である。使用する語彙に制限を設けているので、や

さしいレベルから順番に読み遂げることができる。

この他、児童用学習絵本(Leveled Readers)や英米の絵本、児童書、一般書などがある。

多読を推進している日本多読学会では、本の読みやすさを評価する共通の基準YL(読みやすさレベル)という数値を考案した。YLは0.0～10.0の数値で表し、YLの数値が小さいほど読みやすいことを示す。¹²

私は、多読を始めようと思っている人には、英語が得意な人——たとえばTOEICで900点以上のスコアや、英検1級を持つような人——であっても、まずは「こんな簡単な本で本当にいいのか?」とってしまうほど易しいレベルから始めることを勧める。学校の英語や受験英語にドップリ浸かってきた(その恩恵を受けた)人こそ、多読の入門期には絵本などの易しい本から始めることが大切である。なぜならば、これまで述べてきたように、そのような人たちは(私自身がそうであったのだが)「文法訳読」の習慣——つまり、英文を読むときには一語一語日本語に訳さないと気がすまない、という考え方——を捨て去ることができず、楽しみながら、且つ速く、次から次へと英語を読む、ということが意外とうまくできないからである。日本語訳をしないで、英語を英語のまま読んでいくことができるようになるためには、易しい英文から始めなければならない。難しい本を読もうとすると、また一語一語日本語に訳しながら読み出すおそれがある。

酒井邦秀は、次のように述べている。

英語の先生といえどもペーパーバックをさらさら読める人はそう多くはないと思われます。「絵本から始めるなんて…」とおっしゃらずに、ぜひ子どもに戻ったつもりで絵本を楽しんでください。絵は口ほどに、あるいは口以上にものを言います。climbが「登る」ではないこと、crossのととてもよく使われる意味、英米の日常語messはどんな語と一緒によく使われるか…こうした生きた英語が絵本からわかるのです。それだけではなく、日本語を介さずに英語を英語のまま理解していくことがどれほど快適か実感できます。また、英語の語順のまま理解できるようになると、リスニング力ははっきり違ってきます。先生方の持っていらっ

¹² 古川昭夫・他(編著)『英語多読完全ブックガイド 改訂第2版』(コスモピア、2007年)参照。同書は、多読に適した洋書約12,000冊について、YL、総単語数などを、簡単なコメントつきで紹介している。

しゃる語彙力が直接リスニングに生きてきます。¹³

多読を始めるにあたって、入門用としてどのような本から始めたらよいか、紙幅の関係で詳述することができないが、本稿ではORT (Oxford Reading Tree)を紹介するに留めよう。

ORTは、英語が母語である子どもたちが、「話す・聴く」だけではなく、「読み書き」を学習することを主な目的として生まれた、楽しいリーディング教材である。

イギリスでは80%もの小学校で使われている大人気シリーズで、BBCでもアニメ化され、放送された。日本においても、生きた英語を楽しく学べる英語教材として、多読実践者や多読授業を行なっている英語教師の間で注目を集めている。さまざまなレベルがあり、全体で800冊を超える。¹⁴

レベルは、Stage1から9までである。ORTの中でも大変人気のあるシリーズ「キッパー・シリーズ」を紹介したい。

キッパー (Kipper) という小さな男の子と、姉、兄、両親、祖父、そして友人たちが繰り広げる物語である。キッパーは一家の末っ子であり、やんちゃで甘えん坊だが、決して憎めない存在で、家族や姉、兄も温かく彼に接する。

キッパー・シリーズの中の *A Cat in the Tree*¹⁵ という本を紹介しよう。これは、Stage 3で、YL 0.3、総単語数は79語である。

ストーリーを追いながら、具体的にその中で使われている英語も紹介したい。

犬に吠えられた猫が、びっくりして木の上に登ってしまう。木の上で動けなくなってしまった猫を、Wilmaという女の子が助けようと、木に登る。

そのページを巻末の資料(1)に掲載した。「その猫を捕まえられなかった」という英文が、「She couldn't get the cat.」となっている。「捕まえる」に相当する英単語は catch ではないか、と考える人もいるだろう。しかし、ここでは、英語母語話者の誰に尋ねても catch を使うのは誤りである、と答える。文法的には合っている、使い方が間違っているのである。

その理由は、catch という語は「動いているもの」を捕まえるときに使うのである。この文脈においては、猫は木の上で「動けなくなっている」のである。したがって、ここで catch を使うのは「文法的に」問題はなくても、使い方が完全に間違えているのである。こういう場合は簡単に get を使えばよい。

ここにも、単語を文脈から切り離して単語帳などで丸暗記をする無意味さが表れている。

ストーリーに戻ると、Wilma も木から降りられなくなり、お父さんが梯子を立てかけてくれる。この場面を巻末の資料(2)に掲載した。「梯子をかける」は、英語では、「put the ladder up」となる。これも、聞けばわかるが、咄嗟に口をついて出てくるかどうかは英語ができる人でも必ずしも自信が持てるとはいえないのではないだろうか。さらにその次に、「Wilma climbed down.」とある。この英文も、「climb=登る」と丸暗記している人にとってはなかなか出てこない発想ではないだろうか。「降りる」ときにも climb を使い、climb down というのである。

この後にも「猫を捕まえることができなかった」という文が出てきて、「捕まえる」が「get」になっている。このように、同じような単語や表現が繰り返し間を空けずに出てくるところもありがたい。同様に climb down も後のページに再度登場する。

絵本といっても、決して侮れない。生きた言語材料の宝庫である。

12. 多読と各種英語試験の関係

本校では、私が多読授業を始めてから、学生たちに TOEIC や BACE、ACE 等の英語試験を受けさせたわけではないので、今のところ多読による英語力の向上を測る手段がない(2008年1月に本校1,2年生はACEを受験するので、その結果を待ちたい)。

そこで、ここでは他校、他機関のデータをお借りし、紹介することにする。

まず、SEG¹⁶の中学生・英語多読クラスと BACE の関係を表した表が巻末の資料(3)である。相関グラフもあるが、紙幅の都合上、表を提示するにとどめ、相関

¹³ 酒井邦秀「多読授業の環境作り」『英語教育』(2004年9月号、大修館書店) p.45。

¹⁴ 古川昭夫・宮下いづみ『イギリスの小学校教科書で楽しく英語を学ぶ』(小学館、2007年)を参照。ウェブサイト <http://www.oup-readers.jp/ort/> も大変参考になる。

¹⁵ Roderick Hunt & Alex Brychta (2003). *A Cat in the Tree*, Oxford University Press, 2003.

¹⁶ 中学生、高校生のための学習塾。日本多読学会の事務局はSEG内にあり、SSS英語学習法研究会の英語多読指導方針に基づいた多読クラスが開講されている。東京都新宿区西新宿 7-19-19、電話 03-3366-1466。
<http://www.seg.co.jp/>

係数については簡単に記述するのみとする。

資料(3)の表は、SEG の多読クラス受講生 (中学 1,2 年) が受験した BACE の結果と、高校 1 年の全国平均点を比較したものである。BACE は高校 1 年生用の試験であるにも関わらず、SEG 多読クラスの中学生たちの健闘ぶりがうかがえる。SEG の古川昭夫の分析によると、SEG 中 1 多読基礎クラスは、総合点で高 1 生の平均を上回った。小学生のときの英語未習者からなる α クラスでは、文法・語彙は、高 1 生に劣っているが、リスニングとリーディングでは、中 1 生にもかかわらず、高 1 生に勝る結果を出し、その結果総合点で高 1 の全国平均点に匹敵している。また、中 2 については、基礎クラス・上位クラスともに、高 1 全国平均を、全分野で上回っている。

中 1 多読の小学生時英語未習クラスで、読書記録のある 25 名のリーディングの得点と読書語数の相関を古川が調べた結果、相関係数は 0.34 で、一般の高 1 生と比べて、文法や語彙が弱くても、長文の理解ということになると高 1 生に匹敵する高い内容理解力が身につくことがわかった。

SEG 中 2 多読上位クラスにおいては、総合点において高 1 の全国平均点を 131 点も上回っている。リスニングにおいても、高 1 の全国平均点より 41 点もプラスである。

多読を通じて (特にリスニング用の訓練をしていないのに) リスニング力が向上した、という報告は数多く存在する。多読は、いちいち日本語に翻訳しないで頭から英語を英語のまま読んでいくので、その習慣が身につくと、リスニングの際にも役に立つ。頭の中で翻訳しながら、あるいは「関係代名詞が聞こえたから、その前にあるのが先行詞で、その先行詞を修飾しているのが関係代名詞以降で…」などと情報処理しては、話されている英語を聞き取るなどできない。TOEIC では、リスニング問題において放送される英語は一度しか聞くことができず、繰り返してくれない。

第二言語でのリーディング能力、学習意欲、語彙力、言語能力、ライティング能力、スペリング能力などの領域における多読の有効性については、さまざまな国での多読プログラムの結果として、Richard R. Day らがまとめたものが参考になる。¹⁷

資料(3)の表を見ると、「文法・語彙」においても、中 2 生は高 1 生に勝っている。無味乾燥な単語テストを

続けるよりも、多読のほうが着実に学習者の語彙力を向上させることができるのではないだろうか。しかも、上述のとおり、多読によって向上が可能な領域は語彙にとどまらず、読解、リスニングなどにもおよぶ。

資料(4)は、豊田高専の西澤一が、2007 年 8 月 12 日に日本多読学会ワークショップで発表した際に配布した資料の一部である。工業英単語や CAI 学習など、様々な英語教育を実践し、TOEIC 模試の点数は一旦あがったものの、その後は大きな伸びは見られない。しかし、多読を導入してからは、TOEIC 模試の点数は大きく上昇していることがわかる。

巻末の資料(5)は、豊田高専において 2004 年 4 月から 2005 年 9 月の 1 年半、継続して英文多読授業を受講した 2005 年度の 3 年生のクラス (平均読書量: 31 万語) と、多読未受講の同学年他クラスの TOEIC (Reading) 得点分布 (2005 年 10 月) を比較した図である。

両クラスは、多読授業開始前の 2003 年 7 月に受験した ACE (Reading/総合) 平均点で、多読授業前の英語力に差がないことを確認している (多読クラス: 139/432 点、多読無し: 143/432 点)。さらに、いずれのクラスからも、留学生、留学経験者、ACE 未受験者は除外している。豊田高専の西澤らの分析によると、両クラスの Reading 平均得点には有意な差 (有意水準 5%) が認められた。特に、多読クラスでは、Reading 得点 100 点未満の低得点者が少なく、英語運用能力 (読解力) の底上げに効果があった、と報告している。¹⁸

(「多読授業に向けての基礎的研究 (3)」に続く)

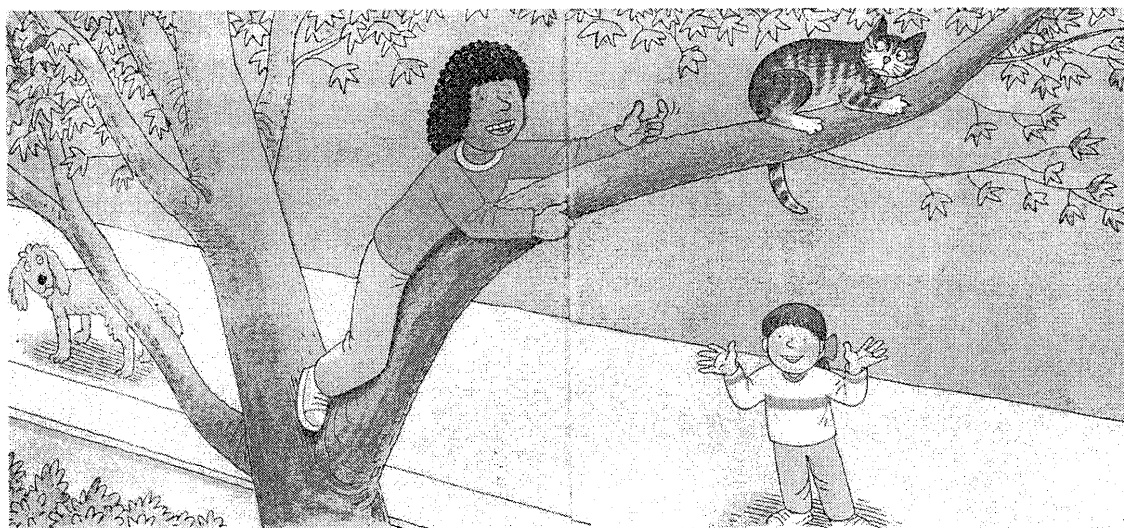
謝辞

本稿の執筆にあたり、鈴木貴志氏 (志学塾)、古川昭夫氏 (SEG)、西澤一氏 (豊田工業高等専門学校)、竹田恒美氏 (東京工業高等専門学校) から多くの助言、および資料をいただきました。紙幅の都合上、そのすべてを掲載することはできませんでしたが、この場をかりてお礼申し上げます。

¹⁷ Richard R. Day & Julian Bamford (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*, Cambridge University Press, pp.32-38 を参照。

¹⁸ 西澤一・他「苦手意識を自信に変える、英語多読授業の効果」『高専教育 第 30 号』2007 年 3 月、国立高等専門学校機構、pp.441。資料(5)も同論文より引用した。

資料(1)



Wilma climbed up the tree.

She couldn't get the cat.

4

5

資料(2)



He put the ladder up.

Wilma climbed down.

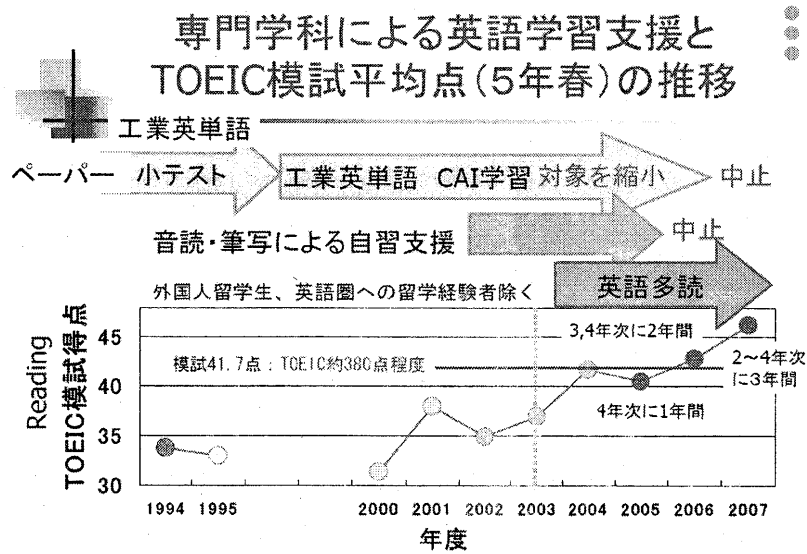
8

9

資料(3)

	高1の 全国平均点	SEG 多読 中1総合	中1α クラス (英語未習者)	中1β クラス (英語既習者)	中2多読 基礎クラス	中2多読 上位クラス
総合(300)	148	166(+18)	154(+6)	184(+36)	232(+84)	279(+131)
リスニング(100)	52	65(+13)	61(+9)	69(+17)	77(+25)	93(+41)
文法・語彙(100)	51	46(-5)	42(-9)	51(+0)	76(+25)	86(+35)
リーディング(100)	45	55(+10)	51(+6)	63(+18)	77(+32)	93(+48)

資料(4)



資料(5)

